

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370465

研究課題名(和文) 甲骨卜辞に見える古代中国の文字文化の研究 史官と文書制度を中心に

 研究課題名(英文) A Study of Character Culture in Ancient China as Seen in Oracle-Bone
Inscriptions: The Role of the Shang Dynasty Historians in Producing the
Inscriptions and their Document Management Systems

研究代表者

陳捷(CH'EN, Chieh)

立命館大学・文学部・非常勤講師

研究者番号：10469182

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、現在公表されている甲骨文字資料を精査し、約80,000片に上る甲骨の著録に関する情報や綴合の成果をまとめ、最新の研究成果を最大限に反映した甲骨学の基本資料として『商代甲骨著録綴合綜表』を編纂し、近く助成金を申請して刊行する。その中から商代の文字文化の担い手としての史官と初期の文書制度を取り上げ、これらに関する全ての卜辞を見出し、必要な関連情報をまとめて綿密に整理し、総合的に考察してきた。

研究成果の概要(英文)：The present study, "A Comprehensive Table of the Records of the Reassembling of the Shang Dynasty Oracle-Bone Inscriptions," is a compilation of the results of an investigation into these inscriptions discovered in China in the 13-11th century B.C.E. It includes an analysis of the latest records of the reassembling of approximately 80,000 slices of oracle-bone inscriptions. It also selectively highlights the works of the most representative Shang Dynasty historians - the bearers of the Shang character culture - who produced oracle-bone inscriptions and developed an early document-management system. Overall, the present research offers the latest available information on the Shang Dynasty oracle-bone inscriptions currently available to the scientific community, and provides the most comprehensive compilation and analysis of the previously disconnected research data in the field.

研究分野：甲骨学、文字学、中国古代史

キーワード：甲骨文字 卜辞 文字文化

1. 研究開始当初の背景

甲骨文字や商代史を研究する時、言うまでもなく最も重要な基本資料は甲骨卜辞である。また、一部の卜辞だけでは正しい結論を得ることが難しく、全ての関連卜辞を把握して全面的に検討する必要があるため、甲骨文字資料は研究成果に関わる決定的意味を持つものである。

甲骨が発見されて百年余りの間に、多くの先学が甲骨卜辞を公表するために尽力した。中国の学者のみならず、林泰輔・貝塚茂樹・伊藤道治・松丸道雄諸氏は日本に所蔵される甲骨をそれぞれ公刊して、甲骨学研究に寄与するところが大きい。

ところで、今日まで甲骨卜辞の著録書が100種くらいに上り、10万片以上の甲骨が公表されたと言われているものの、必ずしも利用しやすい資料とは言えない。もともと一片の甲骨が割れていくつかの断片となって異なる書物に著録されたり、同一の甲骨が複数の書物に重複して著録されたりすることがよくあるのである。『甲骨文合集』（中華書局、1978-1983年）や『甲骨文合集補編』（語文出版社、1999年）は、従来の著録書などから代表的な甲骨拓本をそれぞれ41,956片、13,766片収録し、大きな資料選集としてよく利用されてきた。このほか、『小屯南地甲骨』、『殷墟花園莊東地甲骨』や『殷墟小屯村中村南甲骨』に近年新たに出土した甲骨が収録されている。『英國所蔵甲骨集』、『北京大學珍藏甲骨文字』、『上海博物館蔵甲骨文字』、『中國社會科學院歷史研究所蔵甲骨集』などが次々と刊行され、いずれも既存の蒐集品を整理して著録したものである。

『甲骨文合集』以降の上記の著録書は、重複した著録が免れないだけでなく、さらに綴合できる余地が大いにあるため、刊行後も綴合作業が研究者たちによって行われてきた。それらの綴合の成果は、蔡哲茂『甲骨綴合集』や『甲骨綴合續集』、黃天樹『甲骨拼合集』、『甲骨拼合續集』や『甲骨拼合三集』、林宏明『醉古集』などの著書のほか、多くの論文に散見されている。

このように新旧の著録番号が入り乱れている中、多くの著書や論文に発表された綴合の成果を効率的に参照するのは非常に困難である。『甲骨文合集補編』の刊行から約十五年が経ち、その間に徹底した整理がなされておらず、甲骨資料と綴合の成果が十分に利用されていないのである。

一方、殷代の文字文化の担い手として史官の存在が古くから注目されてきた。史官に関する近代的研究として、王国維の「釋史」は示唆に富んだ名作であり、その後、

陳夢家、徐中舒、胡厚宣、李孝定らが研究を進め、殷代の史官の活動や役割について検討し、具体例を挙げて論述してきた。しかし全ての関連卜辞を視野に入れた全面的な研究は未だ不十分であり、「史」の字形の由来などを含む解明すべき問題が多く残されている。

また、史官の重要な職務内容として文書の作成が想定されているが、富谷至氏に指摘されたように、殷代に簡牘が既に存在していたのか、今のところ分からない（同氏著『文書行政の漢帝国』、名古屋大学出版会、2010年）。殷代の文書制度に関する研究が殆どなされてない中で、私は同文卜辞を研究する際、殷代の文書制度を示唆するいくつかの手掛かりを得て、2012年5月、奈良大学にて「甲骨文字と商代の文書行政に関する一考察」と題する研究発表を行った。ごく初歩的な考察に過ぎなかったが、参加者の反応と期待からもこのテーマの重要性や可能性を強く感じている。次年度からの課題として殷代の史官と文書制度に関する研究は、今までの研究の延長線上に企画したもので、その進展が期待される大変有意義なものと思われる。

2. 研究の目的

本研究は、現在公表されている甲骨文字資料を精査し、約80,000片に上る甲骨の著録に関する情報や綴合の成果をまとめ、最新の研究成果を最大限に反映した甲骨学の基本資料として『商代甲骨著録綴合綜表』を編纂し、広く学界に提供しようとした。その中から商代の文字文化の担い手としての史官と初期の文書制度を取り上げ、これらに関する全ての卜辞を見出し、必要な関連情報をまとめて綿密に整理し、総合的に考察してきた。

本研究は、これまでの研究成果を踏まえて、文字学、歴史学、考古学、文化人類学など複眼的な視点で検討を重ね、古代中国の文字文化、とりわけ商代の史官と文書制度を明らかにし、古代文明に関する研究の新展開を目指している。

3. 研究の方法

『甲骨文合集』から『殷墟小屯村中村南甲骨』まで、ここ三十年間刊行された著録書を主な研究対象として、そこに収録されている約80,000片に上る甲骨の著録情報や綴合の成果を詳しく調査した上で、遺漏なく整理した。それらを分かり易い形でまとめて『商代甲骨著録綴合綜表』を編纂し、早い段階で刊行する。

そしてこれらの基本資料を活用し、商代の史官と文書制度に関する卜辞を全面的に考察し、文字の由来や変遷を慎重に考証し、

世界の古代文明の研究成果を取り入れながら中国の初期の文書制度を探究してみた。更に殷墟遺跡を積極的に踏査し、商代の史官と文書制度を明らかにした。これらの研究成果として、『商代甲骨著録綴合綜表』を刊行し、一連の論文を作成して学術誌に発表し、積極的に発信した。

4. 研究成果

初年度はまず研究資料の収集から始めて、先行研究の成果を広く集め、深く理解し、正確に把握した。『甲骨文合集』(中華書局、1978-1983年)、『小屯南地甲骨』(中華書局、1980、1983年)、『英國所藏甲骨集』(中華書局、1985、1992年)、『甲骨文合集補編』(語文出版社、1999年)、『殷墟花園莊東地甲骨』(雲南人民出版社、2003年)、『北京大學珍藏甲骨文字』(上海古籍出版社、2008年)、『上海博物館藏甲骨文字』(上海辭書出版社、2009年)、『中國社會科學院歷史研究所藏甲骨集』(上海古籍出版社、2011年)、『殷墟小屯村中村南甲骨』(雲南人民出版社、2012年)などの甲骨著録書や、蔡哲茂『甲骨綴合集』(樂學書局、1999年)など綴合関係の著書、論文を丹念に調べ、著録情報や綴合の成果を全て抽出し、基本資料を蓄積した。

また、中国の博物館などの関係機関を訪問し、甲骨の実物や拓本を研究し、コンピュータによって整理を進めながら、『商代甲骨著録綴合綜表』編纂の諸準備を整えた。

このように関連資料を把握した上で、細心の注意をもって整理し、『商代甲骨著録綴合綜表』の編纂を開始した。殷墟甲骨の著録情報や綴合の成果を分かり易い形でまとめてきた。例えば『甲骨文合集』の1番に収録されている甲骨について、次のように記しておいた。

(珠 1207 = 合補 657 = 東大 557 = 合補 624) + (簠歳 5 = 續 2.28.5 = 合 1) = 拼 133

書名略称表を参照すれば、『殷契遺珠』(1939年)所収の珠 1207 という甲骨が『東京大學東洋文化研究所藏甲骨文字』(1983年)に著録された後、『甲骨文合集補編』(1999年)に重複して著録されたことと、『簠室殷契徵文』(1925年)所収の簠歳 5 という甲骨が『殷虛書契續編』(1933年)や『甲骨文合集』(1978-1983年)にも著録されたことと、当該二片の甲骨が綴合されて『甲骨拼合集』(2010年)に掲げられたことが一目瞭然で、1925~2010年の間計7回著録、1回綴合された道程も分かる。従来 of いくつある書籍もこれだけの情報をまとめて提供してくれたことがなかった。

二年目は前年度に蓄積したデータを利用し、拓本などと照合しながら整理し、『商代甲骨著録綴合綜表』の編纂を着実に進めてきた。数十万に及ぶ著録番号を扱うため、校正には細心の注意を払っている。この編纂作業と連動し、最近三十年間の著録情報や綴合の成果を含むデータベースを構築し、今後インターネットで公開し提供する予定である。

そしてプロジェクト前半の成果を踏まえ、史官や文書制度の研究に取り掛かった。まず既刊の史官や文書制度に関するト辞を全て抽出した。拓本だけでなく、できるだけ甲骨の写真や実物をも観察し、ト辞を解読して正確な釈文を作り上げた。さらに関連ト辞を詳しく分類し、「史」など史官関係の文字や「冊」など文書関係の文字を時代ごとに検討し、キーワードとしてもそれらの文字の由来や特徴を探求し、論文作成を始めた。

最終年度は『商代甲骨著録綴合綜表』の初稿の編纂を一通り終え、史官と文書制度の研究を進め、学会で発表する論文を作成した。

まず甲骨の著録情報や綴合の成果について引き続き追加しながらコンピュータによって整理し、『商代甲骨著録綴合綜表』の編纂作業を一通り終え、初稿をまとめた。これからは必要に応じてデータの補正を行った上で、研究成果公開促進費を申請し、京都大学学術出版会より刊行する予定である。

そして上記の編纂作業に取り組みながら史官と文書制度の研究を続けてきた。甲骨ト辞に見える史官の活動を綿密に分析し、とりわけ文書との関連を注意深く考察し、先行研究の成果を取り入れながら新出の資料を加え深く掘り下げてみた。また文書に関連するト辞に基づき、中国の初期段階の文書制度を慎重に探究し、確固たる証拠を挙げて論考を進めてきた。殷墟の宮殿や王陵の遺跡などに留意し、最新の考古発掘の成果を吟味し、諸外国の古代文明の研究成果をも活用し、それらの関係を整理することによって、商代の文書制度を考察した。

これらの研究成果の一部として、論文「貝塚茂樹の甲骨学研究」をまとめ、「出土文獻與中國古代文明研究協同創新中心」の主催で2017年8月に中国人民大学で行われる「出土文獻的世界：第六屆出土文獻青年學者論壇」で発表し、論文集に収録され刊行されることとなった。

このように計画に沿って地道に着実に研究を進め、予定以上に多くの成果を上げることができ、順調に研究目的を達成し、世界の

甲骨学研究に寄与した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 2 件)

陳捷、「貝塚茂樹の甲骨學研究」、「出土文獻の世界：第六屆出土文獻青年學者論壇」、2017年8月8日、北京(中国)。

陳捷、「孔子之戰爭觀管窺」、「先秦諸子與戰爭倫理」學術會議、2014年12月12日、香港(中国)。

〔図書〕(計 2 件)

陳捷 他、『先秦諸子與戰爭倫理』、中華書局、2016、399(109-138)。

陳捷 他、『漢簡語彙 中国古代木簡辞典』、岩波書店、2015、608。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

陳捷 (CH'EN, Chieh)
立命館大学・文学部・非常勤講師
研究者番号：10469182

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()